

教職志望の変動要因について

発表者：吉村篤樹

指導教員：中間玲子

【1. 問題と目的】

本校の卒業生はすべてが教職を目指すわけではなく、平成 23 年度卒業生では 92.1%、平成 24 年度卒業生では、91.4%、平成 25 年度卒業生は、88.3%、そして、平成 26 年度卒業生では 86.8%と、高い水準を維持しているとはいえ、年々下がってきている。その中で、なぜ教師になる者が年々減ってきているのか、その原因に対して、教師になろうとする者はどのように対処したのか、明らかにすることは、教師の数を増やすという観点から、有用な研究だと考える。

本校の特徴として、数多くの実習が組まれていることが挙げられる。それらの実習の中でも、どの実習が有効であり、有効でないのか、数をこなすことは大事なことなのか、そうでないのかは明らかにされていない。また、教師になる気がなくて本校に入学した者は、なぜその後教職を目指すのか、目指さないのか、教師になりたかった者はなぜ教職を目指しており、どのようなことで意識が揺れ動き、最終的な決定を下すのか、これを明らかにすることが本論文における目的である。

本論文の先行研究である若松（2012）から、教職志望意識下降の契機は、「子供と触れ合ったこと」と、「大学での経験」が同程度に高く、教職志望意識上昇の契機は、「教育実習」を挙げることが多いことが分かった。しかし、これは滋賀大学での結果であり、実習が多いという特徴を持つ本学では、こういった教職志望変動の契機については明らかにされていない。以下、若松（2012）の研究方法を踏襲しつつ、研究を進める。

【2. 方法】

筆者が調査を行う上で適切だと考える 6 人に、まず質問用紙に記入をお願いしたうえで、それをもとにインタビューを行った。6 人のプロフィールは表 1 に示す。性別は、E のみ女性で、他は男性であった。質問紙の内容は、若松（2012）が用いた、教職志望意識及びその程度と変化（浮沈曲線によって記入してもらった）、志望意識下降の契機・理由・教職観（これ以降は回答者の自由記述）、志望意識の上昇の契機・理由、志望意識が高まらなかった理由について、の 4 つである。

（表 1）アンケート被験者のプロフィール

名前 (イニシャル)	教採受験	志望校種	教採合否	大学生活
N	未受験	未決定	未受験	人当たりはよいが、授業は不真面目
H	受験	高校	不合格	真面目。いろいろなことに挑戦
E	受験	幼稚園	不合格（私立に合格）	真面目。受験しないと書いていたが、結果している。
S	受験	小学校	不合格	あまり真面目にはみえない。親が教師。バイトと部活に熱心に取り組んでいる。
I	受験	小学校	合格	行動力が高く、様々な経験を積んでいる。
K	受験	小学校	不合格	あまり真面目にはみえない。地方出身だが、神戸市の試験を受験。

【3. 結果】

① 浮沈曲線のタイプ分け

分析の枠組みとして、若松（2012）の浮沈曲線タイプ分け（表2）から、以下のように分けられた。

表2 浮沈曲線のタイプ分類と、今回の結果のまとめ

タイプ名	特徴
上昇後下降型	入学後に1段階以上上昇し、その後1段階以上下降し、そのあとは上昇（1段階以上）しない人・・・N
ジグザグ型	1段階以上の上昇と下降の変化が併せて3回以上の人・・・Eが該当。
下降後上昇型	入学後に1段階以上下降し、その後1段階以上上昇して、そのあとは下降（1段階以上）しない人・・・H、S、I、Kが該当。

② 教職志望意識の下降及び上昇の契機・理由について

教職志望意識の下降及び上昇の契機について、下降と上昇の両方を組み合わせた中で、実習についての回答が一番多かった。実習で下降した理由は、「職場の雰囲気が悪く、幻滅したから（I）」、「考えていた以上に仕事が多く、自分の時間が取れなくなる（K）」といったものが挙げられた。実習において上昇した理由は、「教員に対して、こんな人が教師をしているのかと、幻滅したから（E）」、「回数を重ねるうちに、仕事をうまくこなし、自分の時間を作れるようになったから（K）」、といったものが挙げられた。

実習以外の教職志望意識が上昇した理由に、教育のやりがいを見つけたから（H、S）というものがあつた。これらを見つけた契機は、採用試験に向けての勉強を始めたこと、特に「キャリアセンターに通い、模擬授業の練習などを通して、小学校教育で基礎を固めるというところに教育のやりがいを見つけた」という記述もあつた。

【4. 考察】

実習は教職志望意識に大きな影響を与えることが分かった。これは、自分で考えていた教師という仕事と、現実での仕事との差、例えば教えること以外の仕事の多さ、を感じることで、また、その差を複数回の実習によって埋めていくという構図が見えた。このことから、教育実習の回数を重ねることは、有意義なことであるといえる。また、気を付けたい部分が、こんな人が教師をやっているのか、という幻滅から、教職志望意識が上昇する、というものだ。これは、本来教師になるべきでない者まで、教職志望が上昇してしまう危険をはらんでいる。

教育のやりがいを見つけることは、教職志望意識を上昇させることが分かった。特に、教員採用試験の勉強を進めるうちに教育のやりがいを見つけた、という記述が多かったことから、教育のやりがいを見つける契機は、実習で子どもと触れ合うこととともに、自分で採用試験に向けて勉強することが重要なのだと考えられる。この理由は、実習では、実習生特有の忙しさがあるので、教育に関して、考えを深める余裕がなく、あくまで考え始めるきっかけとなり、実習から帰ってきて、採用試験の勉強を通してじっくりと考えることで、教育のやりがいを見つけ出すのではないかと、いうものが挙げられる。また、採用試験への勉強を進めるうえで、キャリアセンターに通っている者がいたことから、間接的に、キャリアセンターが、教職志望意識を上昇させる要因となっているように見えた。

【主要参考文献】

- 若松 養亮（2013）. 教員養成学部生における教職の選択・棄却に伴う疎外的要因への対処 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 No63. pp. 139-153. 2013
若松 養亮（2012）. 教員養成学部生における教職志望の変動要因 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 No. 62. pp. 87-97. 2012